

童話作家・新美南吉ゆかりの歴史的建築物と郷土のまちづくり

著者	水野 信太郎, 野口 英一郎
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	9
ページ	27-40
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002599/

研究報告

童話作家・新美南吉ゆかりの歴史的建築物と郷土のまちづくり

水野信太郎¹⁾ 野口英一朗²⁾

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科 2) 北翔大学北方圏学術情報センター

抄 録

本論文は筆者らが1993年から始めて更に最近数年間を費やして調査研究を継続してきた「南吉ゆかりの建築物」の研究成果を総括的に記したものである。本稿で詳述する建築物は、①新美南吉の生家、②新美南吉の養家、③旧カプトビール工場、④旧愛知県半田中学の武道場、⑤新美南吉の下宿、⑥都築弥厚の茶室である。これら6棟の建築年代は、江戸期から大正時代までに及ぶ。くわえて上記建築物を起爆剤とするような形で、愛知県半田市ならびに同県安城市において注目に値するまちづくりが展開されている点に関しても言及する。

キーワード：半田、安城、ビール工場、校舎、茶室

I. はじめに

本論文は愛知県西部知多地域に含まれる知多半島の半田市と、西三河地区に位置する安城市内に現存する新美南吉ゆかりの建築物6棟に関する調査研究の成果を報告するものである。童話作家・新美南吉(1913～1943)は知多半島の中央東部である現在の半田市内で大正2年7月30日に生まれた。彼は本名が新美正八(にいみ・しょうはち)で、旧姓は渡辺正八(わたなべ・しょうはち)といった。その名は前年に夭折した実兄の名でもある。

南吉は西三河、現在の安城市で高等女学校に勤務後1年ほどして、戦時下の体制に従い下宿をした。このように生誕地の半田と同様に、安城も南吉にゆかりの深い郷土である。なお「ごんぎつね」は全ての出版社において国語の教科書に採用されている。このため日本中の児童が、彼の童話を正規の授業で学習する。

本稿では以下6棟を記述する。①新美南吉の生家、半田市岩滑中町(やなべなかまち)1丁目83番地、父が明治41(1908)年に入手、昭和58年市が購入、昭和62(1987)年3月復元工事後公開、②新美南吉の養家、半田市平和町(へいわちょう)7丁目60番地、江戸時代後期竣工、修理後昭和48年4月公開、③旧カプトビール工場「半田赤レンガ建物」、半田市榎下(えのきした)町8番地、明治31(1898)年10月竣工、平成27(2015)年7月公開、④旧制半田中学武道場「七中記念館」、半田市出口町1丁目30番地、大正13年3月竣工、現在は公開



版画1 新美南吉(制作:水野)

活用されていない、⑤安城高等女学校教員時代の南吉下宿、愛知県安城市新田町出郷(しんでんちょう・でご)37番地、大見孝司(おおみ・たかし、当時)氏宅の長屋門、大正時代後期竣工(主屋は昭和6年)、南吉は昭和14年4月から同17年秋まで下宿、現在は無料公開⑥都築弥厚の茶室、安城市東端町寺下(ひがしばたちょう・てらした)9の西蓮寺、元来は安城市和泉の都築家に建築、江戸時代後期の竣工か、天保9(1838)年以降に西蓮寺へ移築、昭和40年10月安城市指定文化財、である。

上記の歴史的建築物だけでなく南吉のふるさと半田およびJR安城駅周辺などにおいて実践されているまちづくりについても触れる。

Ⅱ. 新美南吉の生家

1. 南吉生家の所在位置

本章では、新美南吉ゆかりの建築物から生家を記す。この建築物は現在の住所表示で愛知県半田市岩滑中町1丁目83番地において無料公開される。現在の建物は南吉が生まれ育った家屋そのものではない。昭和62（1987）年3月に半田市により、復元・新築された。生家は新しい建築物になったが場所を変えておらず、すぐ前に秋葉講の常夜灯も残されている。また③煉瓦造5階建の旧カプトビール工場は、この位置から南南東1kmの位置にある。

2. 生家の現況

南吉生家は、常滑市大野と半田市街地を結ぶ大野街道に面した畳店と下駄屋の独立店舗併用住宅。生家の主屋は西側に主出入口をもつ木造建築で、平入り切妻屋根を棧瓦で葺いている。街道からは平屋だが、奥方向の東側は地盤が急激に下がり、奥行1間の下屋（したや）ができています。外観は西面と東面が、ガラス窓・ガラス戸の木製建具。とくに西側のガラス面積は広い。西面および東面の壁と戸袋は、簾子（ささらご）下見板張である。南面および北面の外装は、すべて簾子下見板張となる。また南端の道路側には、主屋と同様な仕上げによる外便所が建つ。

室内は西面中央の主出入口から土間が東へ2間程のびて、南・北を分ける。同家は父が畳屋で、母が下駄屋であった。南側が畳屋で、北は下駄屋。両者は1か所の半間を除き土壁で仕切られる。畳屋は西面が腰板ガラス戸で街道からも出入可能。西側過半が土間で、上部は竹を

二つ割りの野地天井である。畳屋の土間と、下駄屋を結ぶ半畳ほどの板張りの高低差は463mmである。畳屋の東側は間仕切がない半間幅の板敷きがあり、更に一段高い東奥にも建具はない。これは、わら置場と呼ばれる4畳弱の広さの板の間空間で、やはり野地天井である。

下駄屋は土間と北側の居室で、南面に半間程の棚があり履物を並べることができる。土間北側は畳敷きで、土間との高低差は482mm。6畳西面は腰板ガラス戸で前面道路に面す。東の4畳との境には建具なし。無目（むめ・建具なし）敷居で一部屋となる。畳は1,700×657mmと通常よりも小さい。天井高は2,108mm、土間とは開放で、中央に175mm角の大黒柱が建つ。通常の柱は100mm角程度。東端が居間で、西側の下駄屋との間に建具が入る。北面に奥行半間ほどの中段框をもつ押入がある。居間は広さが3畳で、天井は押入も含めて野地天井である。

土間の東端から階高1,980mmの下屋へ降りる。下屋の勝手場は2口のくどと、はめ殺し（嵌め込み）ガラス窓に接して井戸と流しがある。東側外部へは片引きガラス戸で出入ができる。ここに1階の床はなく、屋根まで吹抜。勝手場の北が小間で食事部屋なのか、畳敷き4畳で天井高1,552mmと非常に低い。勝手場の南は物置と呼ばれ、床を張っていないが1,860mmの低い天井高。勝手場と物置の壁は、一般的な柱配置ではなく2口のくどの幅を確保するため、物置側に設ける。現況の建築面積は59.88㎡で、延床面積が75.00㎡である。

3. 生家復元の経緯

生家は南吉の実父、渡辺多蔵が明治41（1908）年に入手。その当時、新築か中古物件かについては伝わっていない。多蔵は現在の常滑市大野町で修業を終え24歳頃に故郷へ戻り、当家で畳屋を始めた。南吉は大正2（1913）



写真1 南吉生家外観



写真2 南吉生家室内

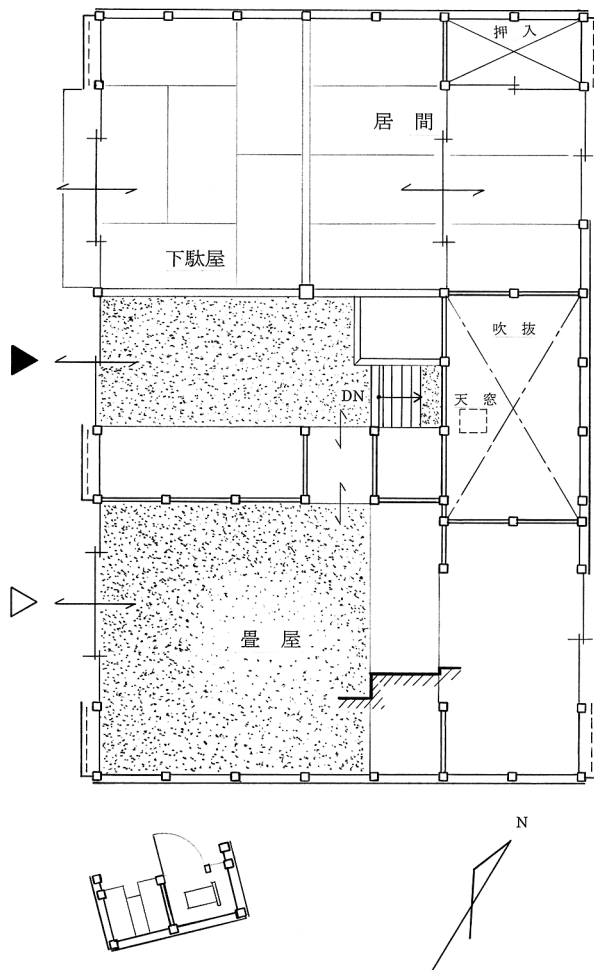


図1 南吉生家1階現状平面図

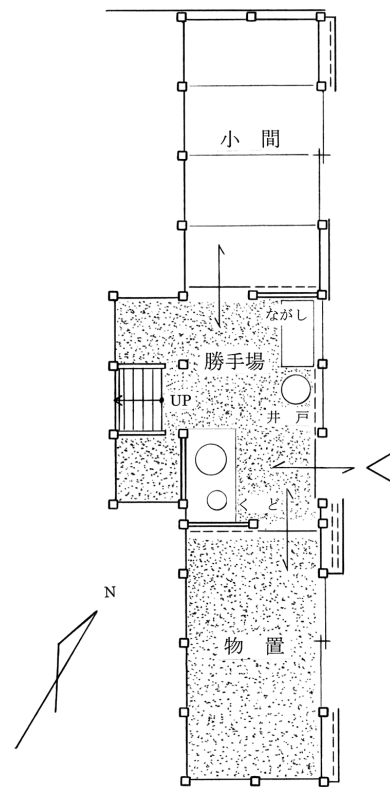


図2 南吉生家下屋（したや）平面図

年7月30日、父多蔵と母りゑの次男として誕生。南吉が生まれた場所は戸籍上で別地が記されているが、ほぼ間違いなく当家屋で生まれたと考えられる。

大正6（1917）年11月に実母（旧姓・新美）が、療養先の常滑で病没する。翌7（1918）年の春には、継母の志んが、父の後妻として生家に住み始める。この継母が下駄屋を兼業した。なお下駄屋業については新美家（実母の実家）の嫁（実母の弟の妻）の証言で、南吉の継母だけでなく実母の時からも営んでいた、と言う。生家の現況を見る限り、当初は畳屋店舗と居住部分だけで途中から下駄屋も兼ねるようになったとは、考えにくい。つまり明治41（1908）年に父が入手した時から、2種類の商品を扱うことのできる店舗を構えていたと思われる。

大正8（1919）年に弟の益吉が誕生。同10（1921）年に南吉は、新美家へ養子に入り継祖母と2人で暮らす。5箇月程で生家に戻る。その後も南吉は亡くなるまで新美姓であった。

渡辺家には生家とは別に、北西へ100mほどの常福院の前に「離れ」があった。昭和5（1930）年、南吉が風

呂を沸かして生家へ戻った後に離れが火事になる。くどや流しのある勝手場が生家の下屋にあるので食事は生家で摂り、離れを風呂や就寝に使用していたと思われる。

南吉は昭和7（1932）年4月東京外国語学校に入学、同11（1936）年3月卒業。東京で就職したが同年11月に帰郷。昭和13（1938）年4月から安城高等女学校に赴任し、翌14（1939）年4月から安城に下宿した。しかし、病状悪化で同17（1942）年の秋ごろ生家に戻る。昭和18（1943）年3月22日に29歳7箇月余りで病没。生家での生活は養家での5箇月、東京時代4年7箇月、安城時代の3年数箇月を除く21年弱である。

生家は多蔵が昭和34（1959）年に亡くなる以前の同24（1949）年頃に、半田の北側に接する阿久比の人物に売却される。その人が所有していた時期のうち、20年間ほどは貸家とされた。やがて昭和58（1983）年の夏に半田市が土地と家屋を購入し、昭和61（1986）年9月から残存していた建築によって復元工事に着工し、翌62（1987）年3月完成させて、現在のように公開している。

以上で南吉の生家について概略を示すことができた。今後は、復元設計がどの程度の痕跡調査などに基づいて行われたのか、また主屋と離れのそれぞれの使い方、浴室の場所やその時期などについて検討を行いたい。

Ⅲ. 新美南吉の養家

1. 南吉と養家の関係

南吉にとって新美家は生母の実家である。従来この建築物は建築史上の位置づけ以上に、童話作家・新美南吉の養子先として文学史の視点から言及される事が多かった。南吉は父・渡辺多蔵と母・旧姓新美りゑの次男である。実母が病没するのが大正6年で、南吉は4歳。

南吉養家は現在の半田市平和町7丁目60番地に現存する中流以上の農家。りゑは新美新太郎と母ふんの第一子で、2歳年少の弟・鎌治郎がいた。明治34年ふんが死去し、新太郎の後妻として志もが嫁してくる。その時代に鎌治郎が志げを娶る。新太郎自身が大正4年に他界。鎌治郎が当主となる。だが同10年には鎌治郎も病死してしまう。鎌治郎と志げには子供がなかった。若嫁の志げは実家に帰され、南吉が義祖母である志もの養子となる。南吉の生家である畳屋と下駄屋には益吉が生れていたの

で、益吉を渡辺家の跡継ぎに決めたのであった。南吉が養家へ引き取られるのは大正10年7月28日。養家の所在地は岩滑の町に比べて寂しい場所で、そのうえ養母が義理の祖母で、家族は養母つまり志もとの二人だけであった。このような暮らしに幼い彼は耐えられず、同年12月には新美正八のまま生家の渡辺家へ戻った。

2. 養家の現況

筆者らが知る当該建築物は、無人で常時開放されていた当時のものである。建具が開け放されて、夏季にはツバメが営巣していた。排泄物で畳が汚れないように、畳の上に厚紙が広げられている状態で、真上にツバメの巣が位置していた。当時の現状平面図と現状断面図が『半田市史 文化財篇』に収録されている。調査をされたの



写真3 南吉養家外観

は当時、中部工業大学（現・中部大学工学部）建築学科教授でおられた富山博（とみやま・ひろし、1930～）先生である。

富山先生調査時と現況で異なる最大の点は、主出入口の大戸である。昭和期には「いつもはおとぐちの横に裏を見せていて、台風などの際には一八〇度回転しておとぐちをふさぐ仕掛となっている回転式の大戸」が記録されている。現在はかつて大戸の軸であったと思われる藁座（わらざ・軸受）が残存している。他の相違点はニワの最奥部北東の隅部が現状では腰壁をもつ引き違い窓であるが、昭和期には北東端部を吊元とする室内方向への開き戸であった。たしかに当該部分の鴨居より下、腰壁などは新しい壁土で塗り直されている。

主出入口から入ると左手西側が居室部で、右手がニワである。現状ニワ北壁に面している「くど」は、昭和期の平面図に示されていない。土間居室境のコエンから床に上がると、南側がダイドコ、北半分がカッテである。さらに西妻面の南側がデイ、北方向はナンドである。

ニワを北へ進み背面戸外に抜けると「井戸」と「ながし」がある。それらを挟んでクラが再建されている。クラは新美南吉の生涯と文学に関する展示空間として活用されている。

当該建築物を構造面で分類すると鳥居（とりい）建てと呼ばれる。両端に建つ柱の上部に、梁を上下2段かけ渡し、その梁間中央に束（つか）がたてられる。形状が神社の鳥居に似ているため「鳥居建て」の名称がある。同様の二重梁構造が居室を四方から囲む。鳥居建の民家は、美濃・尾張・西三河・そして東三河の渥美半島や豊川（とよがわ：河川の名称）以西一帯の農家に見られる形式とされる。愛知県半田市に所在する近世後期の南吉養家も、上記と同様な特徴を示している。なお鳥居建て民家の研究は、名古屋工業大学名誉教授であった故・城戸久（きど・ひさし、1908～1979）工学博士や名城大学の川村力男（かわむら・りきお、1933～）元助教授など



写真4 南吉養家室内

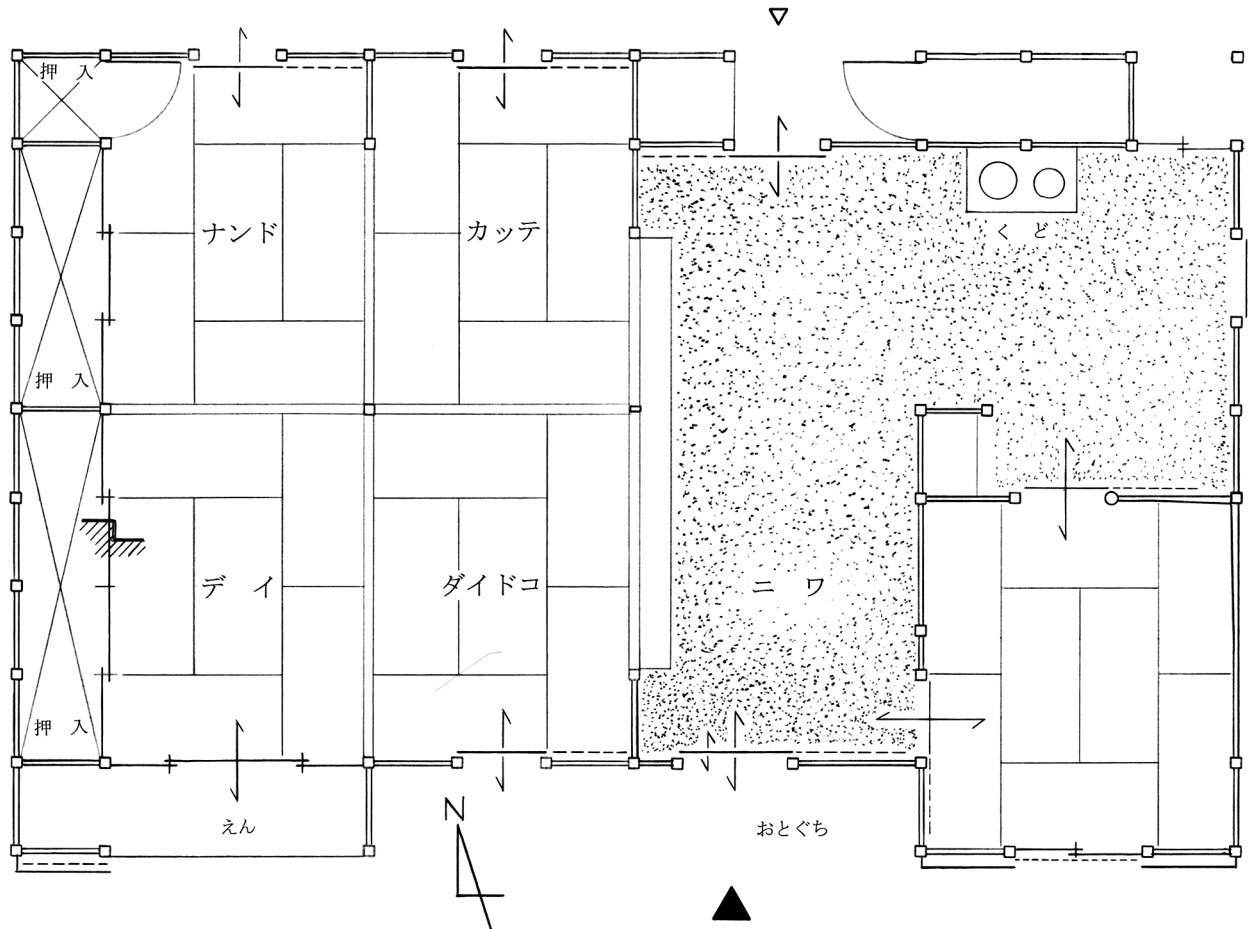


図3 南吉養家現状平面図

が進めてきた。

3. 養家の旧状

古材を根拠に復原すると当該建築物は現状と異なる。現状は四つ間取りだが、竣工時は土間側の居室が2室でなく、ニワ側から見ると横長の広い広間。このため当該家屋は広間型、あるいは奥（妻側）の2室と合わせて広間三間取り（ひろまみまどり）と呼ばれる平面形式である。

広間を現在の4室に分割・改造する際、土間居室境の中央に新しく柱を建てた。当家では見付（みつけ、入口から見える面）寸法が大きな長方形断面の柱を用いている。

4. 養家保存の経緯

南吉養家は、一人住まいであった新美志も（義祖母）が昭和36年に没した後、10余年間空き家だった。その状況下、神谷幸之（かみや・ゆきお）ほか地元の人々の努力によって建築物が守られてきた。南吉の養家を同47年に購入し、翌年までに保存修理工事をして同48年4月から公開した。当該建築物は現在「かみや美術館」の分館

として公開されている。

主屋の南面西側に石碑がある。その記述から養家の保存行為を知ることができる。石材に頁岩（けつがん）が用いられ墓碑銘と刻まれている。表の面は「この石の上を過ぎる（中央部分が剥落：小鳥たちよ。しばしここに）翼をやすめよ」と刻まれた文学碑である。その裏面には「一九七二年秋／北川民次・浅川幸男／神谷幸之この家の保存／を志し、入口坂二・平野功／近藤寅雄・神谷昭／石川治久・石川喬一／神谷伸次・山本助夫等／の善意ある協力により／七三年春完成する／書 幸之／刻 石春」と刻まれ、当該建築物の保存活動を記録する文字が明記されている。前述した『半田市史 文化財篇』には、「養祖母のなくなったあと荒廃していたが、南吉の家運営委員会の努力によって主屋は旧観を残して改修され、かつ失われていた裏の土蔵も復原されて公開されている。」と記述されている。

Ⅳ. 旧カプトビール

1. 旧カプトビール「半田赤レンガ建物」

次に旧カプトビール工場についてその歴史と旧状について述べる。ここでいう旧状とは、筆者らが平成5（1993）年に建築学の専門家としてはじめて調査をした時点での姿を意味する。現在の同建物は、半田市が所有し半田赤レンガ建物と呼ばれる。現在の住所表示では愛知県半田市榎下町8番地で、前述した南吉の生家から南南東約1kmに位置する。同建物は改修工事を終えて、平成27年7月18日に観光拠点施設・半田赤レンガ建物として常時公開される体制を整えた。

2. 南吉と旧カプトビール工場

南吉の生まれ育った愛知県半田市の岩滑（やなべ）地区の南側に位置する上半田地区に旧カプトビール工場がある。旧カプトビール工場の西隣に同地区の氏神である住吉神社があり、毎年の例大祭に「ちんとろ祭」の行事として舟祭りと山車が曳き出される。旧カプトビール工場と道を挟んだ社の前にある宮池に、舟祭りの「ちんとろ舟」が浮かべられる。

南吉は住吉神社や旧カプトビール工場の周辺を舞台として取り上げて「和太郎さんと牛」「うた時計」「千鳥」などの作品を書いている。この事実から同地が、彼自身の深く親しんだ地区であったことが知られる。宮池は『新美南吉全集』の口絵写真に、「南吉が好んだ星名池」として掲載され、同写真の左半分に旧カプトビール工場が写り、右側には鳥居前にある石積などが見られ、これらは現在も残っている。

南吉生家の前面道路は、知多半島を横断して半島の東西を結ぶ大野街道であり、東側が半田の市街地で西側は常滑市大野に通じている。南吉の生家から現在のJR半田駅まで行く際や、当時の半田市の中心地に出掛ける場合には、最短距離となる大野街道を利用し旧カプトビール工場と住吉神社に挟まれた道を通ることとなる。宮池

よりも旧カプトビール工場の土地は低く、両者の間を通っている道が堤防の役割を担っている。

3. 旧カプトビール工場の歴史

旧カプトビール工場は、中埜又左衛門や盛田善平らがビール醸造を明治20（1887）年前後に開始したことが発端である。同25（1892）年に丸三ビールの商品名で販売を始め、丸三麦酒株式会社を設立した。丸三麦酒株式会社は、煉瓦造一部5階建てのビール工場の建設を同30（1897）年9月1日に着手し、翌31（1898）年10月31日に完成した。この工場で生産されたビールをカプト（兜）ビールの商品名で出荷した。

同社は丸三麦酒株式会社から日本第一麦酒株式会社・加富登麦酒株式会社・日本麦酒鉾泉株式会社と変わり、昭和8（1933）年には大日本麦酒株式会社に合併された。合併後も同工場でのビール製造は続いていたが、戦中の同18（1943）年12月に45年余りの歴史に幕を下ろした。その後は終戦まで中島飛行機製作所が使用した。戦後になると日本食品化工株式会社が、同25（1950）年から操業を続けていたが、平成6（1994）年9月に現在地での生産を中止して、工場の解体が進められた。解体途中の同8（1996）年に、半田市が土地と壊されなかった建物を買取った。

旧カプトビール工場は、平成16（2004）年に残された創建時主棟とハーフティンバー棟および貯蔵庫棟として、国の登録文化財になった。当初部分の創建時主棟とハーフティンバー棟は、設計者が妻木頼黄（つまき・よりなか）で、清水組の施工である。増築された貯蔵庫は鈴木禎次（すずき・ていじ）が設計を行った。鈴木禎次は、新美南吉の童話における恩師である鈴木三重吉の、さらに師にあたる夏目漱石の義弟である。

4. 旧カプトビール工場の旧状

旧状についての現地調査は、日本食品化工が操業中であつた平成5（1993）年に、主に煉瓦造部分を対象として各階平面と断面の採寸、復原平面図作成のための痕跡



写真5 カプトビール南側



写真6 カプトビール北側

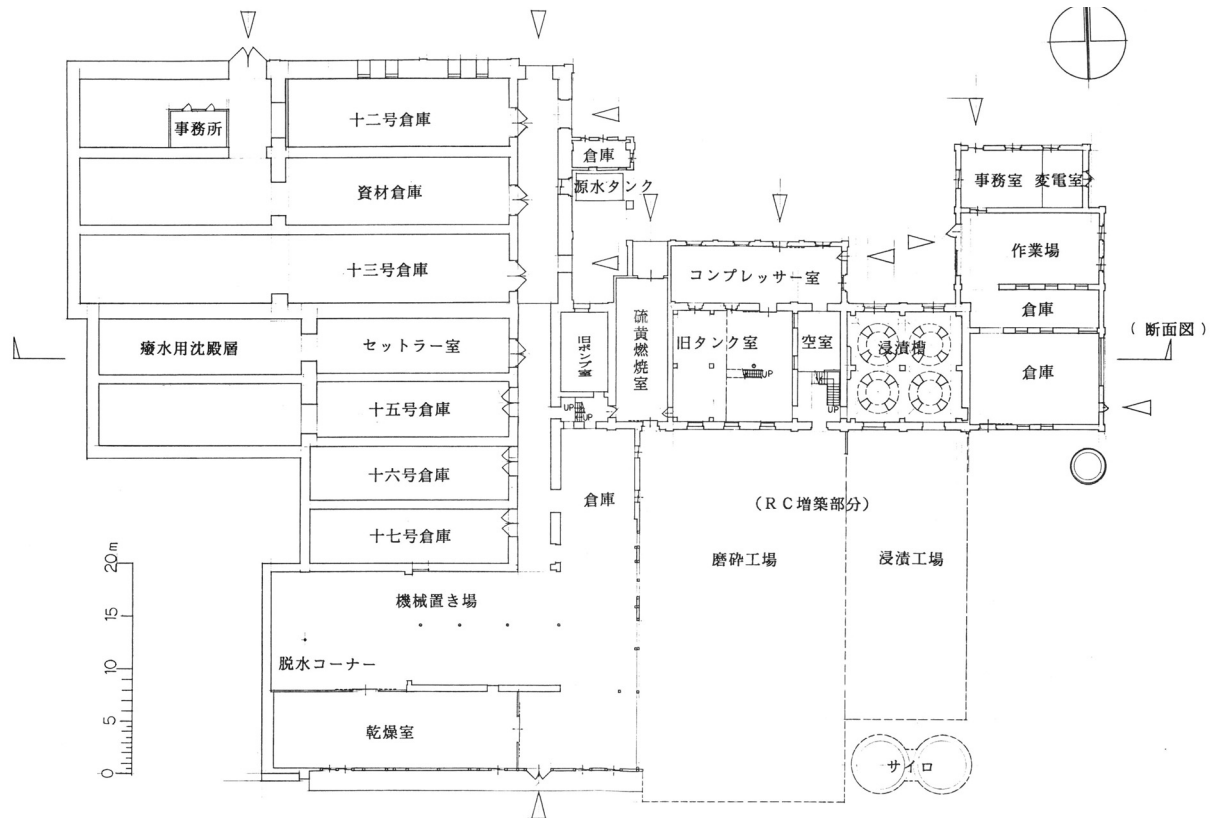


図4 旧カブトビール工場1階平面図

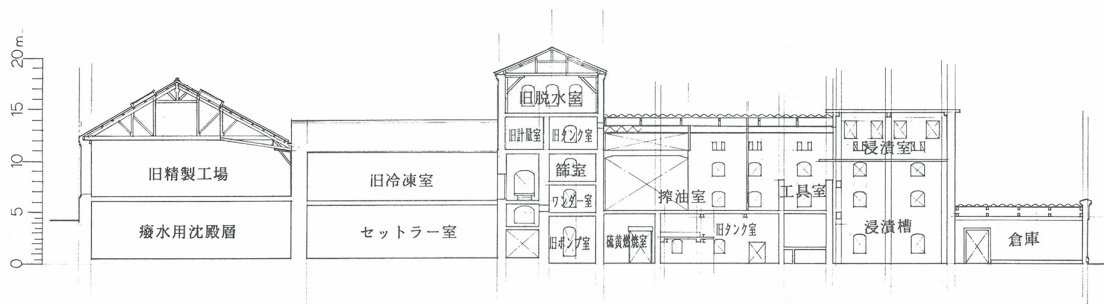


図5 旧カブトビール工場断面図

採取、写真撮影、ならびに組積単材である煉瓦に関して行った。調査によって1階から5階の各階平面図と東西方向の断面図が作図され、当初部分と増築部分の区別などが行われた。実測図の図4ならびに図5に記入した室名は、当時日本食品化工が使用していた名称である。当初部分の北西隅は、セッター室までで、セッター室の西側・北西・北側の3棟がビール工場時代に煉瓦造によって増築されていた。他の増築部分は、旧タンク室の北にあるコンプレッサー室、東では南側の倉庫を除く事務室などであった。南東の磨砕工場や浸漬工場は、日本食品化工が増築した部分であった。乾燥室南面と磨砕工

場西面に接している倉庫の外壁は木骨煉瓦造になっており、全国的に見ても数少ない妻木頼黄の作品である（写真5）。旧ポンプ室と硫黄燃焼室となっている5階建ての主棟が、現存する建築物としては東端に位置する。主棟の東側にはビールを醸造する部分が連続していたが今は失われた。

使用されている煉瓦の寸法は、当初部分が $226 \times 108 \times 57\text{mm}$ 、増築部が $228 \times 109 \times 57\text{mm}$ であった。目地の幅は当初部分が縦10mmで横9mm、増築部は縦横とも10mmであった。当初部分の壁厚は、1階が3枚厚・2階が3枚厚・3階が2枚厚・4階が2枚厚・5階が1枚半厚であっ

た。増築部は1階が3枚厚で、2階の外壁部分が3枚半厚である。また、南側の木骨部分は半枚厚で、この部分の煉瓦の長さが222mmと他の箇所比べて短くなっている。煉瓦の積み方はオランダ積で、木骨部分のみ長手積である。なお旧カプトビール工場については、「旧カプトビールの工場建築について」ならびに「旧カプトビール創業時の工場と醸造技術について」に詳述されている。

以上で、南吉が親しんだ地区に建っている旧カプトビール工場の旧状について概略を示すことができたと言える。今後は平成27年に行われた改修工事と旧状の比較について、検討を行いたい。

V. 半田中学武道場

1. 旧愛知県半田中学武道場

本章は愛知県半田市出口町1丁目30番地に位置する愛知県立半田高等学校の敷地ほぼ中央部に現存する「七中記念館」1棟に関するものである。この旧制中学校施設の一部である旧武道場において、のちの童話作家・新美南吉がスポーツ教育を受けた。

2. 南吉の成長と進学

現在は日本中の小学生に知られる新美南吉であるが、さまざまな困難に見舞われながら今日に至る文学者へと成長した。さまざまな困難とは具体的には、①幼児期に母を失ったこと、②進学のため経済面で解決すべき家庭の事情があった、③青年期以降の健康問題、④高等教育を終えた後の就職先などである。

必ずしも経済的に裕福な家庭に育ったとは言えない南吉が義務教育を終えたのちも進学できた背景には、およそ3点の条件が整っていた。1点目は南吉の学業成績が非常に優れていたこと。そのような事態を看過することができなかった教諭陣が、南吉の親を説得したことが2点目である。さらに中等教育のみならず高等教育を受け

るまで金銭面で支えてくれたのは、生母の実家であり、彼の養家でもあった新美家からの支援であった。

また中学に関しては南吉が自宅から徒歩で通学することが可能な場所に、愛知県立第七中学校として旧制中学が大正8年4月1日に開校される。それは南吉が5歳当時の事であった。

3. 愛知県立第七中学校の開校

愛知県の県立中学校は、明治10年の第一中学校（名古屋）をはじめとして岡崎の二中（同29年）、津島の三中（33年）、豊橋の四中（同年に町立から県立へ移管）、熱田（名古屋市熱田区）の五中（40年）という開校順のナンバーズクールであった。これらの他に私立の中学校が明治30年代から40年代に合わせて4校ほど開校していた。ところが、大正期に入ると、中学校への志願者数が増加する。この状況に応じるため、六中を一宮、七中が半田、八中は刈谷に同じ時期で開校された。

愛知県立第七中学校が6クラス150名で開校した時点では、校舎の整備が間に合わなかった。このため半田町字勘内の半田第一尋常高等小学校唱歌室を職員室、並びに半田町立幼稚園の一部分6教室ほかを借用した。上記の「小学校の片隅にある小さな幼稚園の仮校舎時代」を経て、現在地において大正8年1月起工、翌9年6月に2棟が竣工する。

さらに建築工事が継続される中で校舎とは別に、愛知県立中学校の名称変更がなされる。その結果、ナンバーを廃して県立の「立」をとり、愛知県立半田中学校と改称された。大正11年5月1日のことであった。

本章で詳述する武道場は、他の教室、生徒控室兼体操場、寄宿舍、本館、講堂と共に大正8年起工、同13年3月竣工と記録される。落成式を大正13年11月12日に行なった。それらの設計は愛知県の足立技師によるとされている。

4. 七中記念館の現況

当校舎は同高校敷地全体のほぼ中央に位置する。敷地の東側半分はグラウンドが占める。そのグラウンドに面する形で棟を南北方向に配して建つ。したがってグラウ



写真7 七中武道場外観



写真8 七中武道場室内

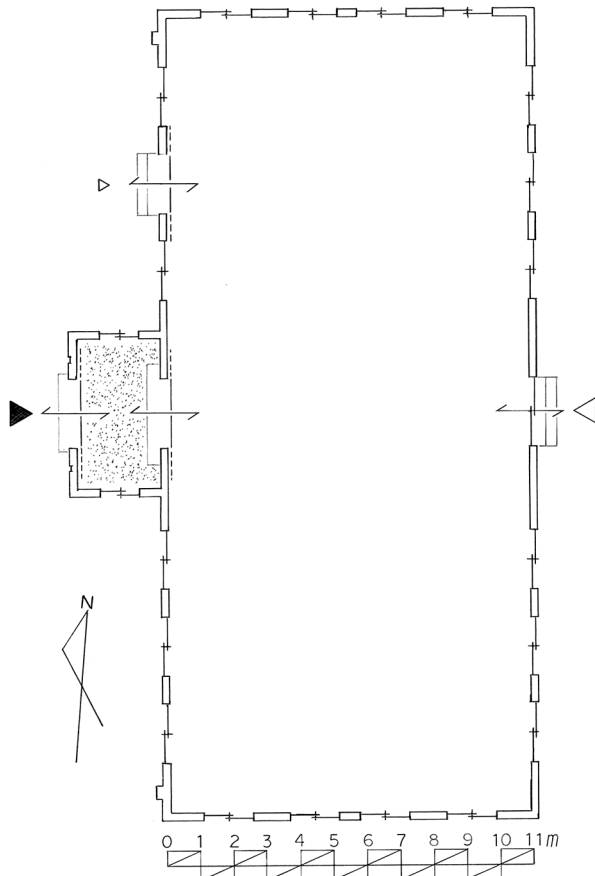


図6 七中記念館現状平面図

ンドからは、七中記念館の東側立面が見える。棧瓦葺き半切妻の屋根が南北にのびており、この大棟とは別に主出入口部分が、片仮名の「ト」の字を反転した姿で西方向に付く。その西側主出入口を構成する一段低い棟は切妻であるが、葺き材料は大棟と同じ棧瓦である。

室内は床全面を板張りとする1室の構成である。開口部は元来の出入口が引分戸、窓は引違窓である。現在は耐震工事を施す予算上の処理ができていないため、高校生が当該建築物を使用する事は許されていない。平成29年6月の時点では同校として、耐震補強を施した上で、七中記念館を保存活用していく方向を検討しているとの事である。

この武道場で新美南吉が、剣道部の生徒として中学生生活をスタートした。大正15年4月のことであった。以上



写真9 南吉下宿外観

において南吉が中学生生活を過ごした武道場に関して現況を述べる事ができた。従来、往々にして病弱・文弱な印象のみが強い新美南吉の文武両道な青春像を示すことができたと考えている。

以上のように半田市内では新美南吉ゆかりのまちづくりが実践されている。南吉ゆかりの建築物の保存、復元、公開事業だけでなく、新美南吉記念館の新設、整備、充実なども続けられている。また写真1に見られる幟（のぼり）などは、南吉の生誕百年を記念するイベントを示している。

VI. 新美南吉の下宿

1. 安城高等女学校教員時代の南吉下宿

これまで記述した建築物は、いずれも愛知県半田市内に現存する南吉ゆかりの建築物である。しかし、これ以降において詳述する調査対象建築は、同じ愛知県内ではあるものの半田市よりも東方にあたる西三河地区の安城市内に建つ。

安城市新田町出郷37に現存する大見博昭家の長屋門の西側半分に、新美南吉が昭和14（1939）年4月から同17（1942）年の秋季まで下宿生活を送った居室が残されている。当時、南吉自身は愛知県立安城高等女学校に在職していた。その南吉教員時代の部屋が、大見博昭氏宅において整備され無料公開されている。

当該長屋門は南側を正面として、棟を東西方向に構える切妻屋根を棧瓦で葺いた平屋建て木造建築である。写真9の左方に見られる細い鉄格子を構えるガラス窓の部屋が南吉の居室であった。門としての重要な機能である敷地内へのアプローチ箇所上部は、軒先まわりを船椽（せがい）造りで構成されている。

長屋門の主出入口は、現状では常時1間幅の開放状態



写真10 南吉下宿室内

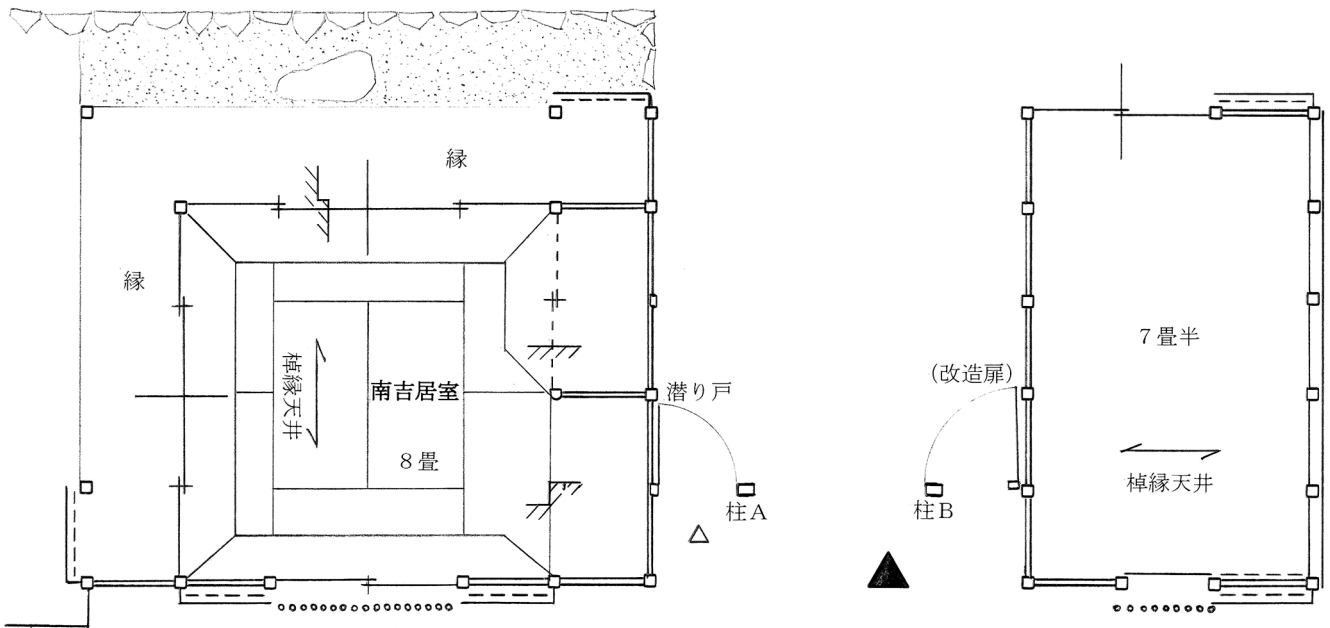


図7 南吉下宿現状平面図

である。しかし図7下宿の現状平面図に示す柱Aの北面（背面）に、かつて蝶番を打ち付けていた金具の痕跡が確認された。したがって旧状は内開きの戸がつけられていたと考えられる。柱Aは当初材と判断されるが、右側の柱Bは後補材である。現状の柱Bは正確には構造材としての柱ではない。自家用車を敷地内へ乗り入れることが出来るように、右側の際壁全体（上部塗り壁・腰の板壁・柱Bを含むすべて）が内側への片開き扉に改造されている。1999年に発行された文献には当該柱が存在しない写真が掲載されている。なお現状の柱Aも柱Bも正方形断面ではなく、前面道路からの見付寸法が大きく、見込（みこみ）寸法は小さい長方形断面をしている。

当該長屋門が竣工時には戸を構えていたであろうことを傍証する事実を列挙しておく。ひとつは潜り戸が遺されている点であり、大見家における南吉の伝承に夜間の帰宅時には戸が閉ざされているため南吉自身が潜り戸を利用したという言い伝えである。さらに近隣の家屋群に戸を有する長屋門が散見される点である。安城市新田町出郷32の大見孝司氏宅には、軒船柵（のきせがい）を組む長屋門に、内側への両開き戸が残存している。また同じく出郷33の大見千里氏宅にも、戸自体は新しい材料と思われるものの、内向き両開き戸がある。さらに新田町郷東27の大見鈺郎氏宅には潜り戸つきの内側への両開き戸が構えられている。

2. 南吉の居室

新美南吉が下宿生活を過ごした部屋は、寸法1787×888

mmの畳敷き和室8畳である。現状では押入に建具はないが、敷居と鴨居には2本溝が掘られている。床の間は65mmの段差をもつ框床であるが、床柱など床まわりには複数の仕口痕跡や埋め木が遺されている。天井は床の間に平行な棹縁天井で天井高は2402mm、内法高は1764mmであった。鴨居が91×41mmで、長押の成は96mmある。

写真10は居室の南面である。引違いガラス窓の外側には、左右にそれぞれ戸袋がついている。居室の西側と北面に縁がめぐり、その上部は勾配を持つ野地板天井である。縁側と外部空間を隔てる建具としては雨戸以外にはガラス戸などはなく、柱外面の一筋敷居に雨戸用の角レールが走るのみである。

新美南吉の旧安城高等女学校教員時代の居室は、大正後期の竣工と考えられる。だが整備事業が完了している現況からは、旧状を詳細に伺うことは困難である。その理由は当初材が限定されている点による。ただし現状平面が以前から公刊されてきた間取りとは異なるという事実を確かめることが出来た。

仮説ながら大正期から昭和初年頃に、当該地域で長屋門を構えることが流行った可能性が考えられる。大見家の近隣に長屋門が多数現存する。前述した事例以外にも、出郷15の長谷川貢氏宅に長屋門が現存している。この一帯にあって建築的な流行があったとされる一例として長屋門ではなく主屋の実例であるが、大見家に現存する昭和6年竣工の主屋を模して、その当時新築された他家の家屋が存在したという。なお大見家の主屋を支える基礎は、赤煉瓦を積んだ布基礎にモルタル塗を仕上っている。

3. 明治期の時計と安城駅前のまちづくり

建築年代と直接関係はないが、南吉居室の南面柱に現在、取り付けられている掛け時計は南吉が下宿していた当時、長屋門ではなく主屋において使用されていた。正時（毎時00分）に鐘を打つ音を南吉が耳にしていたという事実に基づいて、主屋ではなく長屋門に設置されている。この掛け時計は名盤の刻印とラベルから製造した会社を特定することが出来た。富山県高岡市にあった高岡時計製造合資会社で、さらに当該製造会社の来歴から、この掛け時計の製造年代が明治30年から同33年までの極めて短い年代であることも判明した。

また安城市は新美南吉を前面に押し出すまちづくりを展開している。多数の文学碑のみならず、南吉作品に登場するキャラクターを市街地に表出するなど工夫している。

Ⅶ. 都築弥厚の茶室

1. 弥厚の茶室と南吉

本章は新美南吉とゆかりがある建築物のうち、都築弥厚（つづき・やこう、1765～1833）と南吉の関わり、並びに都築弥厚の茶室について述べるものである。都築弥厚茶室は現在、愛知県安城市東端町の真宗高田派西光明山西蓮寺（さいれんじ）内に建つ。同茶室は、昭和40年（1965）10月1日に安城市指定文化財となった。安城市に建つ文化財建造物の中で、数寄屋の建物としては都築弥厚茶室の他に、石川丈山（いしかわ・じょうざん、1583～1672）に関わりのある学甫堂が現存する。同市には前章で詳述した安城高女教員時代の南吉居室もある。出生地の半田市とともに新美南吉に縁のある土地である。南吉は晩年に相当する安城の地で約5年間過ごし「花のき

村と盗人たち」「百姓の足、坊さんの足」などの代表作品を書き上げている。

2. 都築家と弥厚の活動

都築家は都築伊予守をもってはじまりとされ、彦三郎のときに九郎右衛門が分家し、その九郎右衛門の子がさらに分家して、隠居後に也更（やこう、1741～1817）と称した人物が弥厚の父である。也更は現在の安城市和泉で豪農と酒造業において財を築いた。弥厚は也更の長男として明和2年（1765）に生まれ、父・也更と同様に働いた。人望もあり、文化9年（1812）に根崎陣屋の代官となる。

それだけでなく碧海台地を耕作地にしたいと考えた。そのため測量を重ね、文政10年（1827）矢作川上流で取水して開削する新開計画を幕府に提出する。これが明治用水の先駆となる。しかし弥厚は天保4年（1833）に68歳で没する。しかも新開計画の挫折によって、弥厚家に膨大な借財が残ることになってしまう。

3. 都築家の文化的背景

都築家の俳諧は也更に始まり、都築家一統が当地の俳諧を盛り上げた。也更は井上士朗（いのうえ・しろう、1742～1812）の流れを汲む岡崎の鶴田卓池（つるた・たくち、1768～1846）や刈谷の中島秋挙（なかじま・しゅうきよ、1773～1826）と交流したとされる。士朗は名古屋で医業を営み、その師は久村暁台（くむら・きょうだい、1732～1792）。暁台の住んでいた建物が、現在の名古屋市中区の旧所在地から同市瑞穂区陽明町へ大正時代に移築された愛知県指定文化財の暮雨巷（ぼうこう）である。

弥厚は先代也更の影響からであろうか、俳諧を士朗の門下として興じていて「和楽」と号し、也更と同じように卓池や秋挙とも親密な交流があった。弥厚が俳諧を



写真11 音楽を聴きながら読書する南吉



写真12 新美南吉と女学生たちの像

じめた時期は不明であるが、28歳となる寛政5年（1793）の刊行物に彼の名が見られる。文政4年（1821）に、都築家一統が石川丈山の旧宅に隣接して居住する。それ以前からも代々関わりがあったとされ、郷土の文人として丈山の顕彰を行っている。

4. 弥厚と茶道

弥厚の茶道関連事項については、ほとんど伝わっていない。ただし都築家一統では、弥厚の従兄弟である三郎兵衛が不蔵庵龍溪（ふぞうあん・りゅうけい、1760～1842）の門下であった。弥厚は、その関係で龍溪と交流があったものと思われる。龍溪は江戸において僧であったが、やがて浜松や岡崎に住み、30年にわたって西三河の安城だけでなく、遠江や三河地方に宗偏流の茶道を広めている。

弥厚は龍溪と共に天保2年（1831）、岡崎市内の明願寺に建つ淇菴庵（きろくあん）での茶会に招かれた。淇菴庵は江戸時代初期に山田宗偏（やまだ・そうへん、1627～1708）が三州吉田（愛知県豊橋市）の城主・小笠原家の茶頭（さどう）になり、その屋敷内へ建てられたとされる。愛知県指定文化財である淇菴庵は、伝来の道具とともに岡崎市伊賀町西郷中114番地の明願寺（みょうがんじ）へ享保20年（1735）に寄進されている。淇菴庵に接している四畳半は弟也斎（ていやさい）と呼ばれる岡崎市指定文化財で、雅号を弟也斎と名乗った明願寺14世住職・慈玄のために、龍溪によってつくられた。

5. 南吉の『都築弥厚伝』

新美南吉は、多角経営型農業を行なうことで「日本デンマーク」と称されていた安城に赴任する。その耕地面積は、弥厚が生前に計画した明治用水が明治17年（1884）にほぼ完成したことによって増えた。南吉の赴任先は安城高等女学校で、昭和13年（1938）4月から亡

くなる1箇月前の同18年2月まで約5年間勤めた。安城高等女学校は、現在の安城市立桜町小学校の場所である。南吉教師時代の安城は戦時色が徐々に強くなり、「日本デンマーク」が変化しつつあった時期である。

南吉初の単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』が、昭和16年（1941）10月に学習社より発行される。その縁で引き続いて『都築弥厚伝』の執筆を学習社から依頼されたと伝わる。執筆は同年12月には準備に取り掛かっていることが日記に書かれている。執筆のために安城町農会幹事の岡田庄太郎と了雲寺住職の山口英信から、3日間に渡って聞き取りをしている。その内容は、弥厚の思想や農民の暮らしなどである。この聞き取りは「古安城聞書」として残された。南吉は生まれ育った半田での経験を踏まえ、安城の農民と水の関わりをテーマにして『都築弥厚伝』を構想したのであろうか。翌17年（1942）8月に信州の温泉宿を訪れて執筆に着手する予定であった。しかし宿が取れず、群馬県の万座温泉に行っている。その時の原稿は断片さえ残っていないため、この旅行でどの程度書かれたかは不明である。

完成しなかった要因は、当時参考となる資料が不足していたこと、昭和17年（1942）には童話集『おぢいさんのランプ』の発行準備や他の童話集の話や晩年の執筆活動もあって忙しく、さらに体調が悪化したためとされる。人物伝としては学生時代に書いた伝記小説『大岡越前守』が、没した翌年（1944）に出版される。『都築弥厚伝』の内容からは「牛をつないだ椿の木」が連想される。水を題材にしており、主人公が周りの人々のために努力を続けることで、仕事を通じて私欲がなくなり、それだけでなく人として成長し他者に影響を与える人物となる話である。

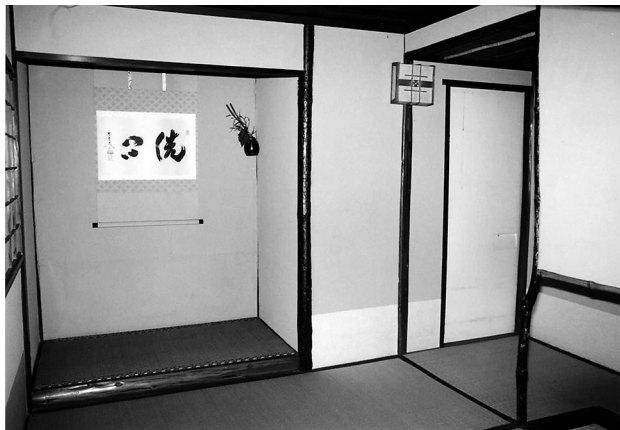


写真13 都築弥厚茶室

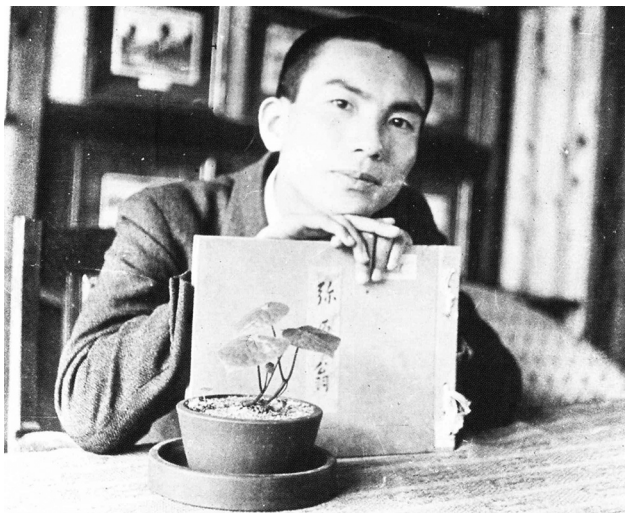


写真14 都築弥厚の伝記をもつ南吉

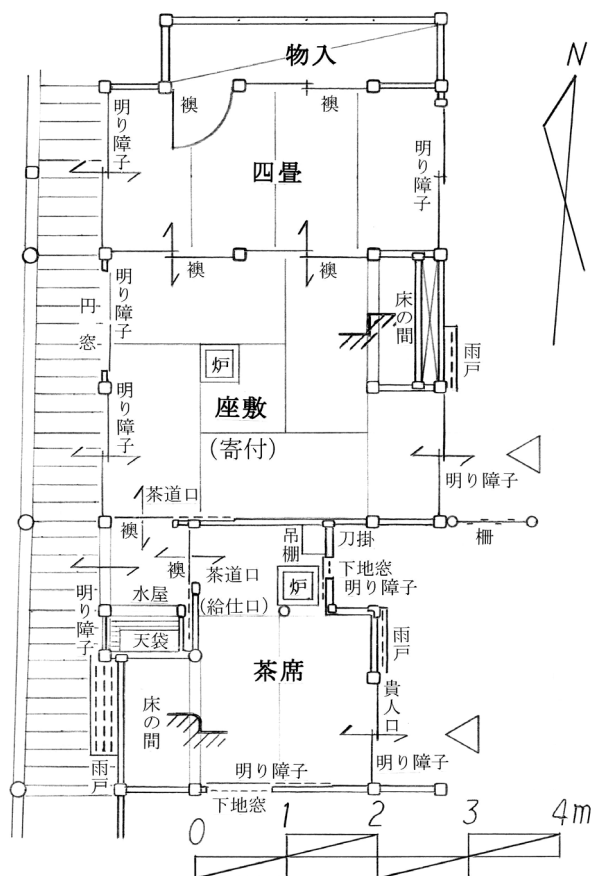


図8 都築弥厚茶室現状平面図

6. 弥厚の茶室

都築弥厚茶室の建立時期は詳らかでないが、弥厚の自邸内に龍溪との好みで建てられたとされる。茶室は、弥厚家の借財整理がほぼできた天保9年（1838）以降に、東端村の大橋新五郎が譲り受け、弥厚の旧自邸から大橋自身の檀那寺である西蓮寺へ移築された。茶室は東に面して建ち、大屋根が棧瓦葺きの切妻で、庇を割竹押えの杉皮葺きにしている。内部は二畳台目・四畳半台目・四畳の3室が並び、西側の廊下で全室がつながる。

二畳台目が茶席で、二畳の客座と台目の点前座（てまえざ）に分かれ、躰口（にじりぐち）ではなく貴人口（きにんぐち）より出入りする。二畳は天井を一面の棹縁天井とし、貴人口の矩折（かねおり）となる南面に下地窓を設けて片引き明り障子が入り、貴人口に対して床を設ける。床は広さ約800×約1,425mmの下座床（げざどこ）で、床柱を赤松とし、丸太の框を用いて畳を敷き鏡天井になっている。墨蹟窓（ぼくせきまど）を設けず、前記の比較的大きな下地窓で光を取り入れる。点前座は向切炉で風炉先窓をあけ、勝手付に一重の吊棚があり、蒲（がま）の落天井（おちてんじょう）を竹3本で押える。客座境は程よく曲った桜の中柱が建ち、壁留（かべ

どめ）兼用の落天井の杉丸太の回縁が通り、中柱には下方を開放とする竹の壁留が付く。この壁留は客座の北東隅まで及び、隅の壁が塗り回される。点前座へは床の側壁を隔てて水屋があり、その水屋から方立の建つ茶道口（ちゃどうぐち）で出入りする。給仕口（きゅうじぐち）は水屋があるため設けることができず、茶道口と兼用になる。

水屋は畳敷きに竹3本が通る網代（あじろ）天井で、水屋棚上部には襖が入る天袋がある。棚は外（西）側に嵌め込み式の明り障子（けんどん式）を取り外するため、障子から離して天袋からの吊竹によって吊られている。また床の背面西側には雨戸を仮置きすることができる。

茶席の隣の四畳半台目の座敷は、四畳半切の炉があり二畳台目とは壁で区切られるが、水屋とは茶道口が設けられる。この座敷は寄付（よりつき）の役目もある。壁面は茶道口の矩折となる廊下側（西面）には中央に柱が建ち、明り障子戸と円窓の明り障子が並び、続く茶道口に対する北側の面も中央に柱が建ち両方とも襖が入る。東側の面も中央に柱が立ち、奥行寸法が約500mmの浅い床があり、床脇の台目部分の畳敷きから外部へ出られる。天井は棹縁天井である。

茶席と座敷の庭は柵や春日灯籠で区切られ、座敷から茶席へは飛石を伝って向う。茶席の外壁には、客座と点前座が同一面ではなく風炉先窓のある壁が奥になっていて、上部に二重の刀掛が設けられている。塵穴（ちりあな）は円形で、座敷南東隅柱の傍にある。

三室目の四畳は座敷との間仕切が襖で、廊下側に明り障子戸がたつ。北面が襖で仕切られた棚のある物入で、庭側は明り障子窓である。天井は庭よりに一畳弱の位置で壁留めを渡して区切り棹縁天井とし、三畳強分を棹縁と竹を交互に配している。なお南吉が当茶室を訪れた事実は文献上からは確認されていない。しかし彼が『弥厚翁』を読んでいるので、同書中に掲載されている弥厚の茶室が安城の地に残されていることを知っていた。

龍溪の作である茶室は『明治村史』には都築家一統の家に建つとされ、遠江や三河地方にも茶室が現存する可能性はある。都築弥厚茶室や弟也斎の他に、龍溪が関わったと伝わる茶室を調べ比較することができれば、龍溪の作風を示すことが今後できると考えられる。

VIII. む す び

これまで紙面を費やして童話作家・新美南吉ゆかりの建築物を愛知県半田市ならびに同県安城市内に訪ねてきた。詳細に記述したとおり、半田市と安城市において歴史的建築物の保存活用とまちづくりが継続されている。

それは南吉が日本中の国語教科書に掲載されている「ごんぎつね」の作者であり、愛知県の出身であるばかりでなく、教員としてもその足跡を残していることにちなんでいる。わたくしどもは今後とも当該地域への関心を失うことなく、郷土の先人を種子とする文化行政および地域振興を見詰めていきたい。

本稿をまとめるに際して実に多くの方々から適切な御教示とお力添えを賜った。新美南吉記念館の遠山光嗣学芸員はじめ同記念館各位、公益財団法人かみや美術館の神谷弘子様、養家の東隣に位置する青木康男様、半田市教育委員会の皆様、中部大学名誉教授富山博先生、旧カプトビール調査チームの小野雅信・水野由美・坂上陽子・竹内尊司・近藤正弘・故山本貴志夫各氏、愛知県立半田高等学校の谷川勝彦教頭先生（当時）、全愛知県赤煉瓦工業協同組合岡田敏夫理事長（当時）、安城市の大見博昭様ご夫妻、近隣の方々、JR安城駅周辺の皆様、安城市企画部企画政策課プロジェクト推進係の杓名宏紀氏、堀尾佳弘建築研究所の堀尾佳弘氏ならびに浅井奈緒美氏、そのほかの方々から特段の御高配を頂戴した。心より謝意を表する。さらに掛け時計の鑑定に際しては中部産業遺産研究会の永井唐九郎氏の指導を得た。なお本研究は北翔大学北方圏学術情報センターから研究費を認められた結果、進めることができた。末尾ながらこの紙面を借りて感謝申しあげる次第である。

また本研究を進めるに際して参考とした先行研究は次のとおりである。

Ⅸ. 文 献

- 1) 「新美南吉養家」富山博、『半田市史 文化財篇』愛知県半田市、昭和52年10月1日、PP. 85-86
- 2) 神谷幸之『南吉おぼえ書』全五集、かみや美術館、1990年4月15日
- 3) 新美南吉記念館『生誕百年 新美南吉』新美南吉記念館、2013年7月
- 4) 新美南吉に親しむ会『安城の新美南吉』新美南吉に親しむ会、1999年10月1日
- 5) 新美南吉『新美南吉全集』第5集 小説集、牧書店、1965年11月1日
- 6) 水野信太郎・野口英一朗・小野雅信・水野由美・坂上陽子・竹内尊司・近藤正弘・山本貴志夫「旧カプトビールの工場建築について」『産業遺産研究』第1号、中部産業遺産研究会、1994年5月21日、p12~p28
- 7) 山本貴志夫・水野信太郎・野口英一朗・小野雅信・水野由美「旧カプトビール創業時の工場と醸造技術について」『産業遺産研究』第3号、中部産業遺産研究会、1996年6月2日、p31~p58
- 8) 『愛知県立半田高等学校誌』同校創立記念事業実行委員会、昭和55年7月1日
- 9) 『校定 新美南吉全集 別巻Ⅰ』同編集委員会、大日本図書、1983年9月30日
- 10) 明治村史編纂委員会『明治村史 下巻』明治村史編纂委員会、1966年
- 11) 狐牛会『ひとすじの流れ 評伝都築弥厚・石川喜平』安城文化協会、1972年
- 12) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編文化財Ⅰ 建造物・史跡』愛知県、2006年
- 13) 安城市史編集委員会『新編安城市史2 通史編近世』安城市、2007年
- 14) 遠山光嗣「日本デンマークと幻の「都築弥厚」-新美南吉の安城時代〈二つの背景〉その一-」『新美南吉記念館研究紀要第16号』新美南吉記念館、2010年
- 15) 『弥厚翁』愛知縣碧海郡教育會、明治用水普通水利組合、大正8年4月25日